



1 千葉県市原市西広貝塚出土土貝製装身具  
縄文時代後期  
千葉県指定有形文化財



2 現生オオツタノハによる貝輪復元品



3 千葉県船橋市古作貝塚出土蓋付土器と貝輪  
縄文時代後期（左：2号土器オオツタノハ9点を含む）  
\*堀越知道氏撮影



5 東京都三宅島ココマ遺跡出土オオツタノハ貝輪未製品  
弥生時代中期



4 千葉県千葉市加曾利貝塚出土のオオツタノハ製貝輪  
縄文時代中期（左2点：北貝塚） 縄文時代後期（右4点：南貝塚）



6 三宅島ココマ遺跡  
\*手前左崖面下部が遺跡 前方に見えるのは御蔵島



7 東京都御蔵島におけるオオツタノハ生息地点（御前）



8 御蔵島におけるオオツタノハ生息状況



9 御蔵島におけるオオツタノハ探索調査



10 御蔵島採取のオオツタノハ



11 東京都八丈島採取のオオツタノハ  
殻長95mm



12 神奈川県三浦市雨崎洞穴出土の各種貝輪  
弥生時代中期  
下段中央：オオツタノハ 右：ウミギク



13 鹿児島県種子島広田遺跡と出土した貝製装身具  
弥生時代～古墳時代  
重要文化財



14 種子島広田遺跡出土のオオツタノハ製貝輪装着人骨 北区1号墓  
弥生時代終末期



15 種子島広田遺跡出土 C 地区 14号人骨装着のオオツタノハ製貝輪  
左：殻長114mm 右：101mm



16 種子島採取の現生オオツタノハ  
上記15相当サイズ  
左：殻長113mm 右：100mm



17 種子島北東岸・久保田における  
現生オオツタノハ生息地点



18 種子島久保田で採取した現生オオツタノハ



19 種子島西之表市小浜貝塚出土オオツタノハ製貝輪  
縄文時代前期



20 種子島北東岸・湊オニガセにおける  
現生オオツタノハ生息地点



21 奄美大島宇宿小学校遺跡出土のオオツタノハ製貝輪  
縄文時代後期



22 奄美大島における現生オオツタノハ採取調査  
(島北東沖の瀬・トンバラ)



23 伊豆諸島御蔵島における現生オオツタノハ捕獲の瞬間（島南沖の瀬・平根）



24 トカラ列島最南端横当島における現生オオツタノハの生息状況

# 貝輪の考古学

——日本列島先史時代におけるオオツタノハ製貝輪の研究——

## はじめに

---

人と貝とのつきあいは長い。食べ物としていかに利用されてきたかは、日本列島各地に残された縄文時代の貝塚をみれば明らかである。ここに暮らした人々ほど、有史以前より好んでさまざまな貝を食してきた者はあるまい。

一方、軟体動物である貝に目を向ければ、長い生物学的進化の過程で、河川、湖沼、海洋とあらゆる水域、そして陸上をも棲息域とし、世界中に分布している。稀にそれがないものもあるが、軟体部を守る貝殻をもつのが特徴で、形態はさまざまである。貝殻は硬いカルシウムでできており、ものによっては石に匹敵する強さや加工のしやすさがあるため、道具の素材としても利用されてきた。

しかし、貝殻の魅力は何といてもその形、色、艶、質感にあり、古来より人々を魅了してきた。とくに日本列島は四方を海で囲まれ、南北に長い地理的特徴から、寒冷域から温暖域までさまざまな貝類が生息する世界的にきわめて稀な場所で、人と貝との関係はほかに例がないほど濃密である。

本書は、装身具の素材となった「貝」に着目し、先史時代の人々と貝との関わりについて、考古学的な資料と生物学的なデータから論じる。装身具に使われた貝を調べることで、当時の習俗・社会形態・交易ルートなどさまざまなものがみえてくると考えているからである。

そのなかでも「貝輪」を主対象とした。貝輪は貝殻をくりぬいた装身具で、古代人のプレスレットである。縄文時代から古墳時代にかけてつくられ、材料には二枚貝のアカガイ、ベンケイガイ、巻き貝のアカニシ、ゴホウラ、イモガイなどさまざまな貝が使われた。

このうち、カサガイの仲間のオオツタノハ、貝殻一枚からなる貝に着目する。オオツタノハを材料とする貝輪は関東を中心に東海から北海道、そして九州を中心とした広い地域の遺跡から出土するとともに、縄文時代早期から古墳時代の終わりまでえんえんと使いつづけられた。これはほかの貝にはみ

はじめに 3

## ■ 第I章 食用の貝と利器用の貝 ..... 13

### 第1節 食糧としての貝：貝塚にみる食用貝 13

- ①…縄文時代の貝塚 13
- ②…貝塚を構成する貝種 15
- ③…内湾干潟に生息する貝類の実例 18

### 第2節 道具の材料になった貝：「搬入貝」の識別 20

- ①…貝塚からみつかると稀少貝 20
- ②…ハマグリ製の「貝刃」と「貝ヘラ」 22
- ③…アリソガイ製の貝ヘラ 23
- ④…「舌状貝器」と呼ぶもの 24

### 第3節 貝製装身具：出現の古さと広範な分布の意味 29

## ■ 第II章 東日本における縄文時代の貝輪 ..... 33

### 第1節 縄文時代の「貝輪」の特徴 33

- ①…学史上の「貝輪」の定義 33
- ②…貝輪出土数の変化 34
- ③…貝輪素材の変化と分析の視点 34
- ④…フネガイ科製貝輪 36
- ⑤…イタボガキとアカニシ製貝輪 46
- ⑥…縄文時代中期の貝輪の実態と評価 53

### 第2節 ベンケイガイ製の貝輪 54

- ①…ベンケイガイとは 54
- ②…研究の方法・現生打ち上げ貝類調査 55
- ③…ベンケイガイの打ち上げ地と打ち上げ状況 56
- ④…遺跡出土資料からの検討 61
- ⑤…ベンケイガイ製貝輪の製作方法 72
- ⑥…ベンケイガイ製貝輪の生産遺跡 76

### 第3節 貝輪素材変遷の理由 94

- ①…貝輪となった貝の素材としての優位性 94
- ②…貝輪素材貝の流行の背景 98

られない現象で、オオツタノハ製品の特殊性とこの貝に対する先史時代の人々の意識の高さを示している。ほかの貝にはない模様、色合い、質感、そして稀少性が最大の魅力だった可能性が高い。

これまで、オオツタノハの生息地は北緯30度近くの鹿児島県トカラ列島と大隅諸島、そして伊豆諸島の鳥島のみに限られると考えられていた。だとすれば、これらきわめて遠方の海域から手に入れ、日本列島全域に流通させたことになる。しかし、あまりにも遠く、入手先としては現実的でない。遺跡出土の貝輪片を観察しながら、頭に浮かんだ素朴な疑問をきっかけに、生物学的な視点を軸にした研究を始めた。

貝類を生物学的に分析し、その結果を考古学的資料分析と関連づけることによって、今まで考えられてきたとは異なる先史時代における貝輪の実態とその意義が明らかになってくるのである。



第4節	貝輪装着にかかわる習俗	103
	①…貝輪装着に関する研究史	103
	②…貝輪装着人骨	104
	③…貝輪内周長の検討	104
	④…人骨装着貝輪の内周長	106
	⑤…貝輪装着実験	106
	⑥…古作貝塚出土の蓋付土器内の貝輪	106
	⑦…貝輪装着に関する考察	108
第5節	各集落内で行われた「貝輪製作」	114
	①…祇園原貝塚出土の貝輪製作関係遺物	114
	②…貝塚集落出土資料の解釈	115
附節	特異なベンケイガイ打ち上げ地：千葉県鴨川市における追跡調査の記録	117
	①…調査方法と目的	117
	②…調査の記録	117
	③…前原海岸にみられる現象	119

### 第III章 東日本における弥生時代の貝輪 ..... 125

第1節	出土遺跡と貝輪の様相	125
	①…茨城県ひたちなか市差洪遺跡	125
	②…群馬県神流町岩津保洞窟	126
	③…群馬県みなかみ町八束脛洞窟	128
	④…神奈川県三浦半島の海蝕洞穴遺跡	128
	⑤…神奈川県三浦市赤坂遺跡	132
	⑥…千葉県市原市東千草山遺跡	132
	⑦…東京都三宅島ココマ遺跡	132
	⑧…富山県氷見市大境洞窟	133
第2節	弥生時代に使用された貝輪素材の特徴	135
	①…フネガイ科（サルボウガイ・サトウガイ・アカガイ）	135
	②…タマキガイ科（タマキガイ・ベンケイガイ）	136
	③…マツバガイ	137
	④…オオツタノハ	138
	⑤…ウミギク科	139
	⑥…ボウシュウボラ	140
	⑦…垂飾素材・マクラガイほか	141
第3節	現生貝調査成果からみた東日本弥生時代の貝輪の様相と展開	142
	①…縄文時代以来の伝統の踏襲	142
	②…局地的な集積素材の利用	142
	③…稀少貝種への傾倒	143

### 第IV章 東日本におけるオオツタノハ製貝輪 ..... 145

第1節	「西の貝の道」と「東の貝の道」	145
	①…日本列島における二つの貝文化	145
	②…研究の目的	146
第2節	伊豆諸島を起点としたオオツタノハ製貝輪生産	147
	①…各地資料の様相	147
	②…三宅島ココマ遺跡出土資料の分析	156
	③…三浦半島海蝕洞穴遺跡出土の資料	161
	④…伊豆諸島における現生貝調査	163
	⑤…伊豆諸島におけるオオツタノハ製貝輪生産	178
	⑥…「東の貝の道」：その経路と様相	185
第3節	南海産の「貝材」の流通と房総半島集落の役割	189
	①…西広貝塚の発掘調査と貝製装身具類	189
	②…素材貝の入手場所と入手方法の推定	190
	③…タカラガイ・イモガイ類加工品の生産遺跡	195
	④…「貝材」供給の拠点	202
第4節	オオツタノハとともに伊豆諸島から運ばれた貝	204
	①…タカラガイ類	204
	②…イモガイ類	208
第5節	南海産の貝製品を模造した土製品	209
	①…動物形の土製品	209
	②…東日本各地で出土する貝製品形土製品	209
	③…模造された南海産の貝の供給地	215
	④…「南海産貝製品の模造土製品」が示すもの	216
第6節	タカラガイ・イモガイ製品にみる社会的役割	216
	①…「の」字状イモガイ製垂飾	217
	②…タカラガイ加工品bタイプ	223
	③…生と死との関わりを示す貝製品の扱い	225

### 第V章 九州地方における縄文時代の貝輪 ..... 231

第1節	九州地方出土貝輪の様相	231
	①…資料の集成と属性の分析	231
	②…貝輪素材貝からみた傾向と解釈	232
第2節	東名遺跡出土の縄文時代早期における貝製装身具	234
	①…遺跡と調査の概要	234
	②…貝製品の概要	235
	③…使用された貝種	236
	④…素材貝種からみた考察	237
第3節	飛櫛貝塚出土の縄文時代後期における貝製装身具	242
	①…遺跡と調査の概要	242
	②…貝製品の概要と貝種からみた考察	242

第4節	山鹿貝塚出土の縄文時代後期における貝製装身具	244
	①…遺跡と調査の概要	244
	②…人骨副葬品の概要	244
	③…貝製品に使用された貝種と考察	245
第5節	佐賀貝塚出土の縄文時代後期における貝製装身具	247
	①…遺跡と調査の概要	247
	②…貝製品の概要と使用された貝種からみた考察	247
第6節	黒橋貝塚出土の縄文時代後期における貝製装身具	254
	①…遺跡と調査の概要	254
	②…貝製品の概要と使用された貝種からみた考察	255
第7節	麦之浦貝塚出土の縄文時代後期における貝製装身具	255
	①…遺跡と調査の概要	255
	②…貝製品の概要と使用された貝種からみた考察	256
第8節	柁原貝塚出土の縄文時代後期における貝製装身具	257
	①…遺跡と調査の概要	257
	②…貝製品の概要と使用された貝種からみた考察	257
第9節	川上（市来）貝塚出土の縄文時代後期における貝製装身具	259
	①…遺跡と調査の概要	259
	②…貝製品の概要と使用された貝種からみた考察	259
<b>第VI章 南西諸島におけるオオツタノハ製貝輪</b> .....263		
第1節	広田遺跡と「西の貝文化」	263
	①…広田遺跡と貝製装身具	263
	②…広田遺跡出土貝輪の様相	264
	③…広田遺跡出土貝製品などの新資料	268
第2節	種子島における縄文、弥生・古墳時代のオオツタノハ製貝輪	270
	①…椎ノ木遺跡（馬毛島）	270
	②…上能野貝塚	270
	③…鳥ノ峯遺跡	271
	④…阿嶽洞窟	272
	⑤…一陣長崎鼻遺跡（貝塚）	272
	⑥…小浜貝塚	273
第3節	大隅諸島における現生オオツタノハの調査	276
	①…西日本の生息分布に関する見解	276
	②…口永良部島の現生貝調査	276
	③…屋久島の現生貝調査	282
	④…種子島の現生貝調査	283
第4節	トカラ列島および奄美諸島におけるオオツタノハ製貝輪と現生貝調査	292
	①…オオツタノハ製貝輪の様相	292

- ②…トカラ列島および奄美諸島における現生貝調査 297
- ③…奄美大島における現生貝の打ち上げ状況 310
- ④…現生貝調査からみた遺跡出土貝輪の解釈 310

第5節 沖縄諸島におけるオオツタノハ製貝輪と現生貝調査 313

- ①…沖縄諸島における貝輪の様相 313
- ②…沖縄諸島におけるカサガイ類製の貝輪 314
- ③…沖縄諸島におけるオオツタノハ製貝輪の生産遺跡 318
- ④…慶良間諸島における現生貝調査 320

**第VII章 考古学・生物学的調査が明かすオオツタノハ製貝輪の実態**..... 327

第1節 オオツタノハ採取と貝輪加工 327

- ①…オオツタノハの採取 327
- ②…貝輪製作工程および加工法 333

第2節 現生貝調査からみた広田遺跡の貝輪の解釈 334

- ①…素材採取地 334
- ②…採取法・貝輪生産集団の存在（貝輪生産体制） 336

第3節 現生貝調査からみたカサガイ系貝輪の評価 338

第4節 西日本におけるオオツタノハ製貝輪の流通 340

- ①…富山県小竹貝塚（縄文時代前期）の貝輪 340
- ②…岡山県彦崎貝塚（縄文時代後期）の貝輪 342
- ③…富山県大境洞窟（弥生時代）のオオツタノハ製貝輪 344

第5節 最高峰の威信財としてのオオツタノハ製貝輪 346

- ①…生物学的調査からみた日本列島におけるオオツタノハの分布 346
  - ②…日本列島東西におけると先史時代貝輪素材獲得の実態 347
  - ③…オオツタノハの成長 348
  - ④…希少性を認識したオオツタノハ製貝輪の扱い 351
  - ⑤…貝輪専用に使された唯一無二の素材の意味 357
- 結びにかえて：残された研究課題と展望 359

参考文献 361

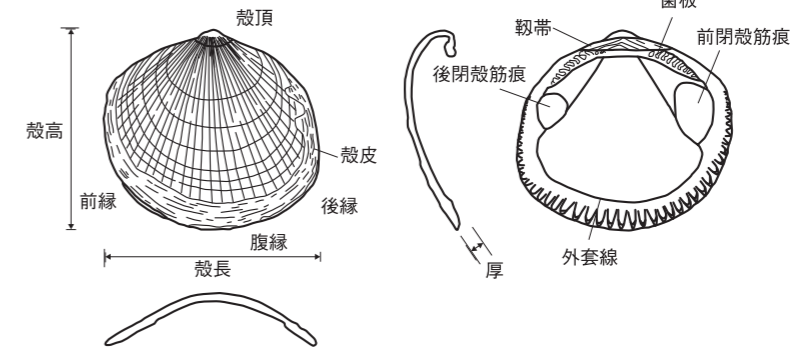
初出一覧 375

写真提供・所蔵 377

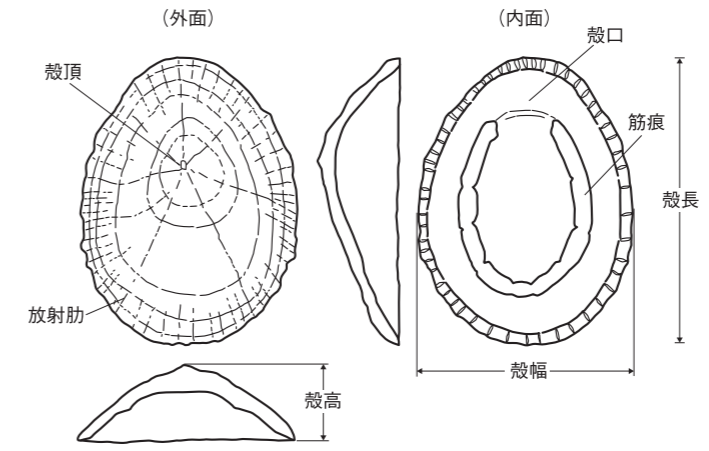
あとがき 379

貝殻の部分名称

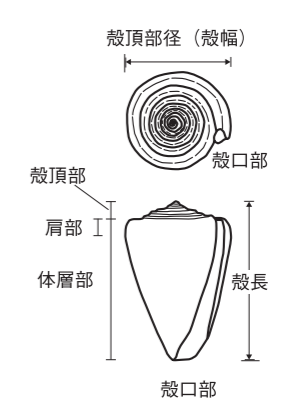
〈ベンケイガイ〉



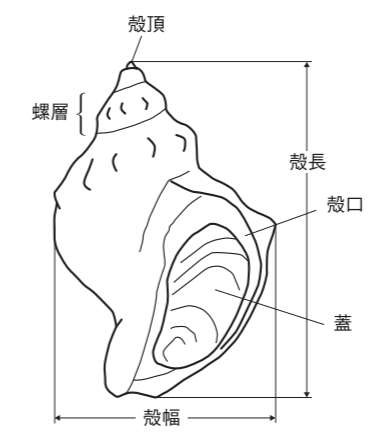
〈オオツタノハ〉



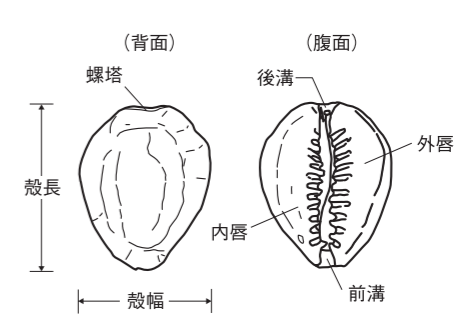
〈イモガイ〉



〈一般的な巻貝〉



〈タカラガイ〉





## 第1節 …食糧としての貝：貝塚にみる食用貝

### ① …縄文時代の貝塚

房総半島の中央に位置する千葉縣市原市には、日本列島一貝塚密度が高い東京湾東岸域を代表する大貝塚が多くみられる。今から約3500年前にできた西広貝塚は、直径がおよそ150m、小学校の校庭ほどの広さがあり、貝層の堆積は最大で2mにも達する（図I-1）。貝塚は、採取した貝類をムラに持ち帰って食べた後、住まい周囲に捨ててできたものである。厚さ2mもの貝塚を形成するのに、この遺跡ではおよそ1000年の時間を要しており、その間繰り返し貝殻などが投棄されたことになる。



貝層の平面調査



貝層の断面調査

図I-1 西広貝塚の発掘調査



図 I-2 日本列島のおもな貝塚分布地帯と南関東の主要貝塚

日本列島に貝塚が形成されはじめるのは、縄文時代早期の段階で、今からおよそ1万年近く前のことである。この頃、気候は徐々に温暖化の傾向を示すようになり、あわせて海水面の上昇が始まる。はるか沖合にあった海岸線は、やがて陸地に迫りはじめ、人々は積極的に海と関わるようになる。こうした営みの結果、各地に貝塚が形成されるようになるのである。

地理的には北海道から沖縄まで、時代的には縄文時代から近・現代に至るまで、四方を海で囲まれるという特有の自然環境を反映して、日本列島には数多くの貝塚遺跡が形成されたが、その中心となるのが関東地方、なかでも東京湾沿岸地帯である（図 I-2）。とくに三方を海に囲まれた千葉県には700カ所以上の縄文貝塚があり（西野ほか 1999）、この数は列島全体のおよそ30%にもあたるといえる。

## ② …貝塚を構成する貝種

貝塚からみつかる貝を調べることによって、当時、何をどのくらい採っていたか、そして当時の海のおよその状況を知ることができる。千葉県下には貝塚遺跡が多く、発掘調査事例も多い。ここではそのなかから代表的な遺跡を選び、縄文時代の食用貝の構成を概観しよう。選択した遺跡は、東京湾の奥（内湾域）に位置する西広貝塚（市原市教育委員会 2007）、湾の出口付近（湾口部域）の富津市富士見台貝塚（金子 1964）、房総半島の先端（外洋域〔岩礁〕）の館山市鉦切洞窟（金子・和田 1958）、房総半島東海岸の外房（外洋域〔砂浜〕）に立地する多古町境貝塚（多古町遺跡調査会 1987）である（図 I-3）。いずれの遺跡も縄文時代後期に属する。図 I-4 に各遺跡から出土した貝類の内訳を示した。4遺跡で組成が大きく異なり、当時の海の状態とそこで採れた貝の違いを知ることができる。

西広貝塚は、80%以上を直径2cm以下の小さな巻貝であるイボキサゴが占め、残り20%のうち6割ほどを大型の二枚貝のハマグリ、そのほかはシオフキやアサリなどの二枚貝という構成である。いずれも内湾砂泥底に生息する貝類である。富士見台貝塚は、60%を小型巻貝のスガイが占め、そのほかバイ・サザエ・コシダカガンガラなど中・大型巻貝がついでいる。主体は岩礁域に生息する貝類で、一部にオキアサリやシオフキなど砂浜に生息するものもある。鉦切洞窟は、およそ40%がサザエやイボニシなど中・大型巻貝、ついでスガイ・クボガイ・バテイラ・イシダタミ・クマノコガイなど小型の巻貝類がみられる。ほかにトコブシ・アマオブネ・アワビ、そしてカサガイ類のマツバガイなどがある。いずれも岩礁域に生息する貝類である。境貝塚は、およそ60%を大型の二枚貝であるチョウセンハマグリが占め、これにつぐのが直径3cmほどの巻貝であるダンベイキサゴで、ほかにハマグリやアサリなどもわずかにみられる。チョウセンハマグ



図 I-3 房総半島の主要貝塚

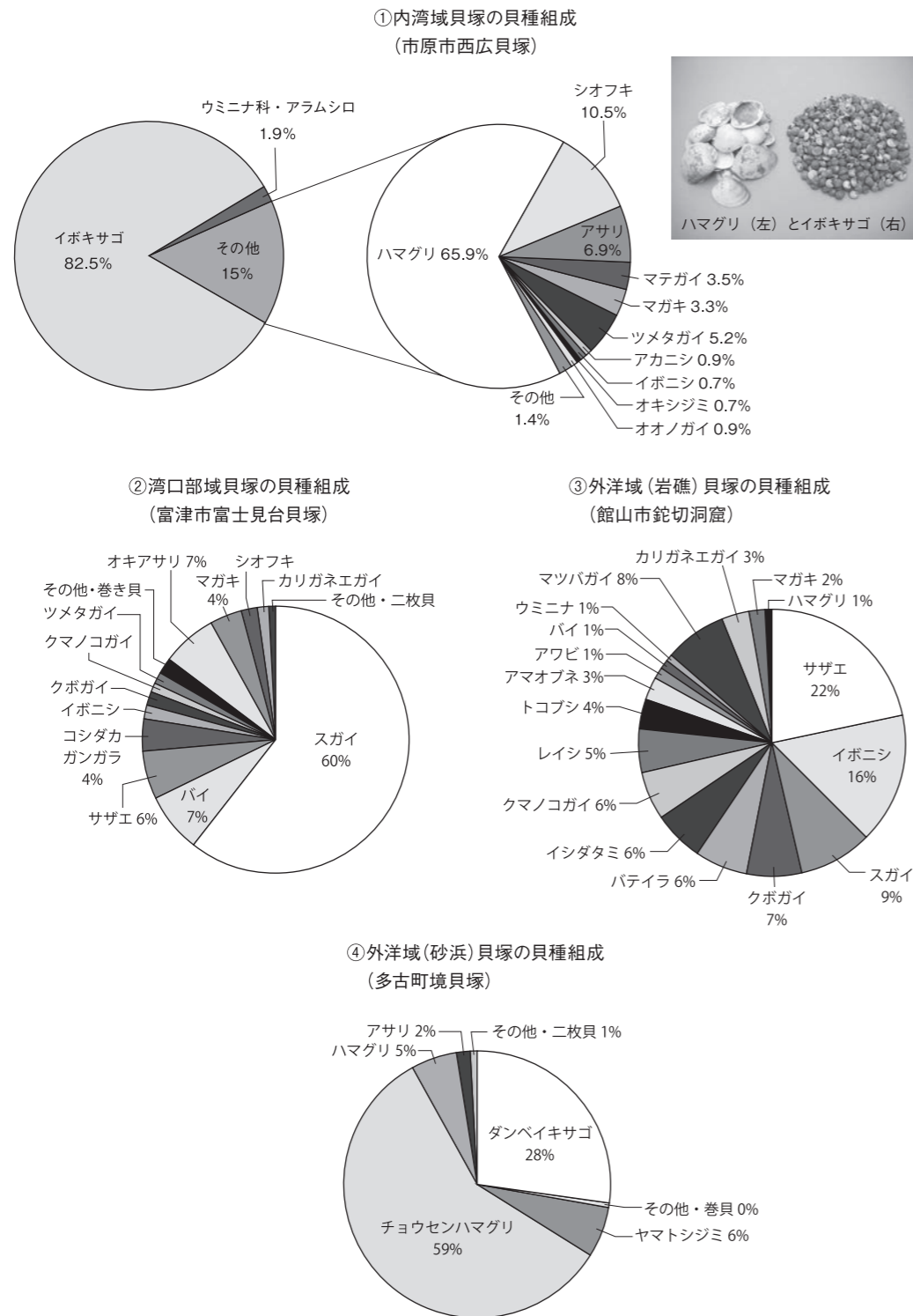


図 I-4 海域による貝種組成の違い



図 I-5 房総半島の海の景観

リやダンベイキサゴは、西広貝塚でみたハマグリやイボキサゴと形態的には似るが、いずれも外洋の影響の強い砂浜に生息する別種の貝類である。

以上、4カ所の遺跡の貝種組成は特徴的な海域環境を示しており、それらは遺跡付近にみられる現在の海の様子と基本的には大きくは変わらないといえる(図 I-5)。すなわち、西広貝塚の貝類組成は内湾奥部に広がる広大な干潟の存在を示し、そこではイボキサゴを主体とする巻貝やハマグリ・シオフキ・アサリなどの二枚貝が多く生息する。現在の東京湾の内湾域のほとんどは、工業用地として1950年代以降に干潟の埋め立てが進んだため、遺跡付近で海の様子を直接知ることができないが、船橋市や木更津市のごく一部には自然の干潟が残り、当時の干潟の面影にふれることができる。富士見台貝塚の貝種組成は、内湾から外洋への変換点である湾口部域の様子を示す。ちょうどこのあたりは、内湾域の砂浜干潟から南房総へと広がる岩礁域が始まる変換点であるため、砂浜と岩場に生息する貝類が混在する状態にあり、このことが貝塚の貝類組成にも反映されている。鉦切洞窟の貝種組成は、外洋に面した岩礁を主体とした海域環境をよく示している。このあたりでは岩場と砂浜が織りなす潮溜まりが随所に存在し、岩礁は沖合い深く続く箇所もある。そのことが浅い潮溜まりに生息するイボニシ・スガイなど小型の巻貝類と、岩場のやや深いところに棲むサザエなど大型の巻貝類が多い組成に表れている。境貝塚の貝種組成は、外洋に面した広い砂浜の存在をよく示している。この海域は、内湾の穏やかで干満の大きい環境とは異なり、波が荒く干満の差が少ないという特徴をもち、砂底の粒土も著しく大きい。こういっ

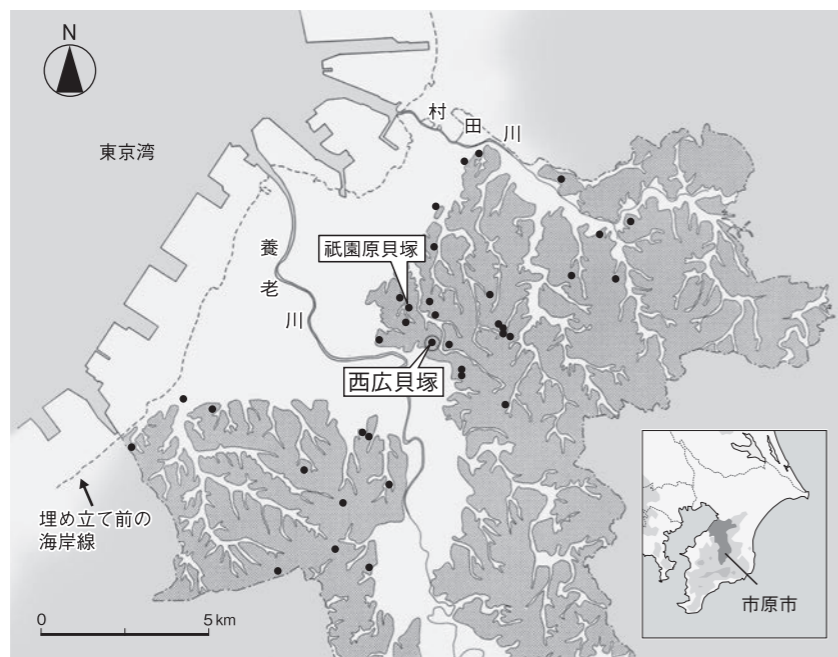
た砂浜には、チョウセンハマグリ・コタマガイなどの二枚貝やダンベイキサゴなどの巻貝類が多数生息する。

このように、千葉県には表情の異なる多様な海の姿が現在も比較的よく残り、遺跡からみつかるとる貝類は、当時ムラ近くに展開していた豊かな海域環境とそこで練り広げられた食の営みの姿を伝えてくれている。

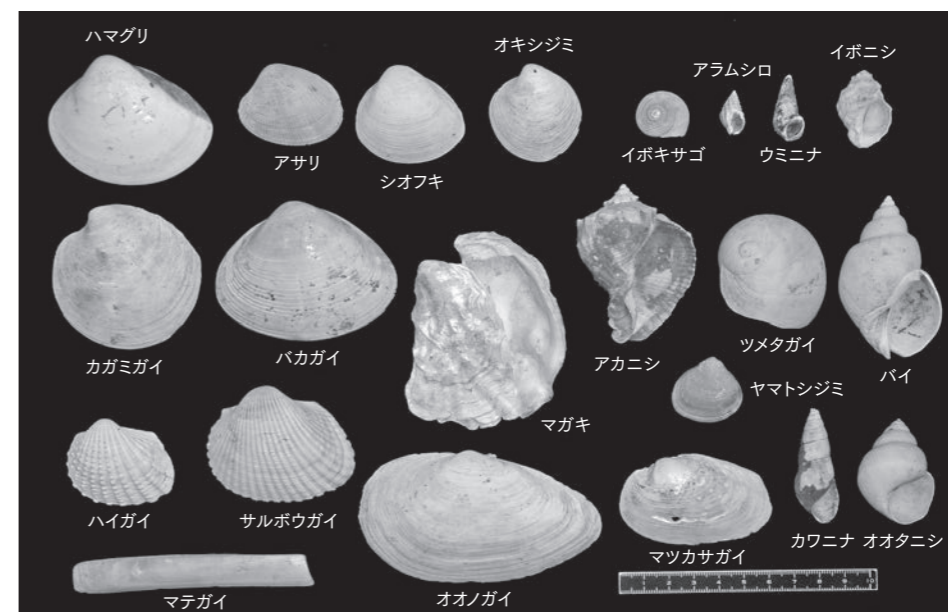
### ③…内湾干潟に生息する貝類の実際

総数700カ所にも及ぶ千葉県の縄文貝塚のうち、大部分は東京湾奥部の内湾域に存在する。潮が満ち引きする中間、満潮線と干潮線の間を潮間帯と呼ぶが、内湾の浅い海には、この潮間帯に砂・泥・小石などさまざまな底質をもつ広大な干潟が形成される。潮間帯より上部（高い位置）を潮上帯、下部（低い位置）を潮下帯と呼び、それぞれに特有の海洋生物が存在するが、ことに潮間帯には多種多様、多量の貝類などが生息しているのである。現在の行政区分で市川市・船橋市・千葉市・市原市などには、数十年前までは広大な干潟が展開し、魚貝類など豊かな生態系を維持する日本屈指の漁場を形成していた。密集する貝塚遺跡の数と、そこから出土する膨大な数の魚貝類遺体は、その豊かさの証しといえる。

このうち、千葉県のほぼ中央に位置する市原市域には、およそ40カ所の縄文貝塚が存在し（図I-6）、西広貝塚などで長年にわたって発掘調査と整理作業が続けられてきた。ここで明らかとなった貝種は図I-7に示すようにおよそ20種である。汽水域に棲むヤマトシジミや淡水産のマツカサガイ・カワニナ・タニシ類がみられることは、当時の人々の採貝領域が海域以外に河口や



図I-6 千葉県市原市内の貝塚分布



図I-7 内湾域貝塚の主要貝種（西広貝塚・祇園原貝塚）



図I-8 西広貝塚の貝層断面



図 I-9 イボキサゴの生息状況



図 I-10 採取したイボキサゴの貝殻と軟体部

淡水域にも及んでいた証拠として重要であるが、その比率は低く、採貝の主体領域は眼前に広がる広大な干潟にあった。市原市を含め、およそ東京湾東岸域の貝塚の貝種組成は、その大半を小型巻貝のイボキサゴが占め、ハマグリ・シオフキ・アサリなどの二枚貝がこれにつぐというものである(図 I-8)。

遠浅の東京湾の干潟は、春の大潮の最干潮時には、満潮時の汀線からはるか沖合まで歩いて行けるほどにもなり(図 I-5①)、その奥部にはまるで蒔いたかのようにイボキサゴが密集状態で生息している(図 I-9)。その状態は、「貝が湧く」と表現されるほどで、生息数はおよそ30cm四方で200個体に及ぶほどにもなる。貝塚から出土する膨大なイボキサゴの個体数は、それらを手当たり次第に採取してきた結果として理解できよう。イボキサゴ一個当たりの実入りはごく少量かもしれないが(図 I-10)、これが多量に集まったとき、その食糧としての価値は見逃しがたいものだったはずである(忍澤 2008b)。これをベースに、実入りの多いハマグリやアサリを加えれば、貝類の食材としての位置づけは不動のものとなったに違いない。また、イボキサゴの価値はスープの出汁としたときの「うま味」にあったのではないかとする見方もある(西野 2009)。東京湾東岸部におけるイボキサゴ大量採取の背景には、広大な干潟に大繁殖する貝類の生態と、これらをあますことなく利用しようという縄文社会の食糧戦略が合致したものとみられる。

## 第2節 …道具の材料になった貝：「搬入貝」の識別

### ① …貝塚からみつかるとは稀少貝

貝塚を発掘すると、前述のハマグリ・アサリ・イボキサゴなどに混じって、いくつかの見慣れない貝が見つかることがある。それらはいずれも1%に満たないため、これまであまり注意して扱われることがなかった。これらの貝は、貝塚を構成する貝類の主体にはならないので、「稀少種」などと呼ばれる。

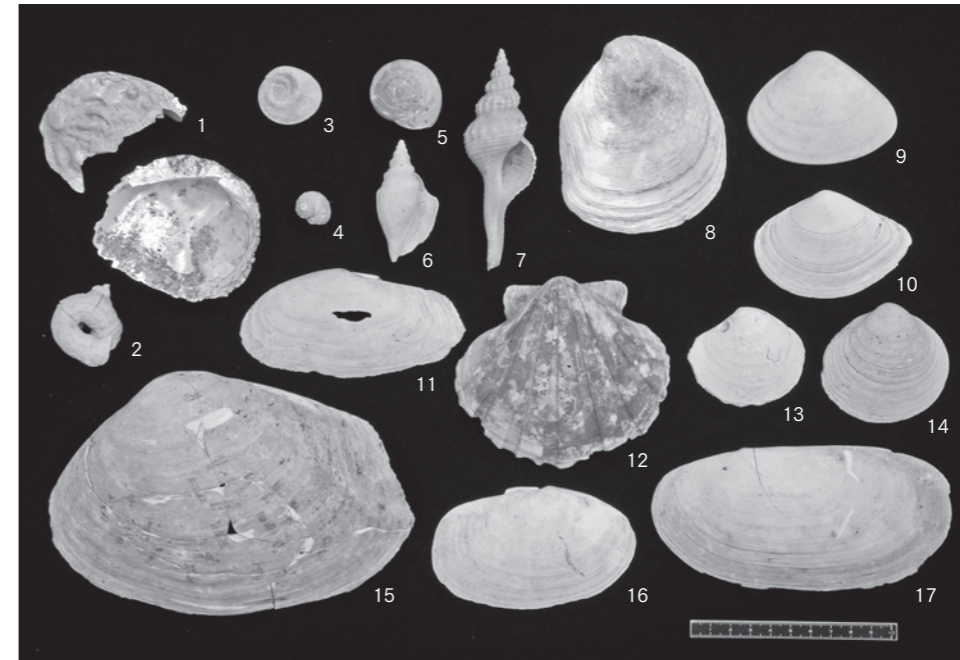


図 I-11 西広貝塚出土の稀少種(一部、祇園原貝塚出土)

表 I-1 西広貝塚出土稀少貝の生息域

貝種	生息域		内湾		外洋			
			砂・礫底		砂底		岩礁	
	分類	写真No.	浅場	深場	浅場	深場	浅場	深場
イタボガキ	二枚貝	8		●				
ダンベイキサゴ	巻貝	5			●			
チョウセンハマグリ	二枚貝	9			●			
コタマガイ	二枚貝	10			●			
ワスレガイ	二枚貝	13			●			
シドロガイ	巻貝	6				●		
ナガニシ	巻貝	7				●		
ムラサキガイ	二枚貝	11				●		
イタヤガイ	二枚貝	12				●		
タマキガイ	二枚貝	14				●		
ミルクイ	二枚貝	15				●		
フジナミガイ	二枚貝	16				●		
オオトリガイ	二枚貝	17				●		
サザエ	巻貝	3					●	
スガイ	巻貝	4					●	
オオヘビガイ	巻貝	2					●	
アワビ類	巻貝	1						●

注)「生息域」の写真No.は図 I-11 参照